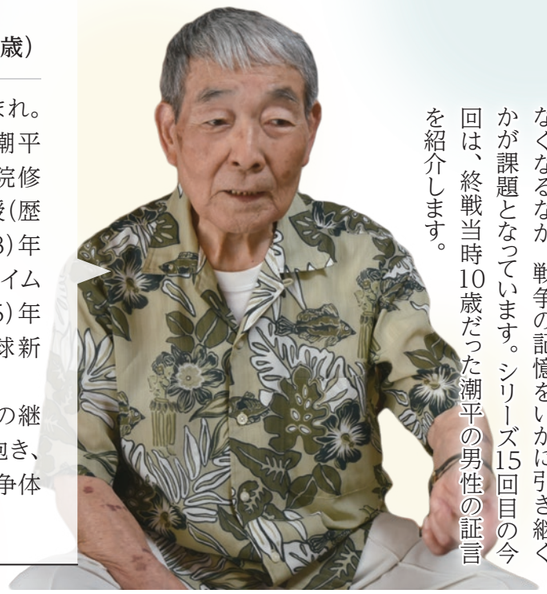
特集

戦跡を歩く 15

6月23日 慰霊の日

沖縄戦終結から76年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、戦争の記憶をいかに引き継ぐかが課題となっています。シリーズ15回目の今回は、終戦当時10歳だった潮平の男性の証言を紹介します。



金城 正篤（きんじょう せいとく）さん（86歳）

1935（昭和10）年生まれ。糸満市字潮平出身。潮平在住。京都大学大学院修了。琉球大学名誉教授（歴史学）。1978（昭和53）年に伊波普猷賞（沖縄タイムス社）、2013（平成25）年に東恩納寛惇賞（琉球新報社）を受賞。
次世代への戦争体験の継承について危機感を抱き、地元の子どもたちに戦争体験を伝えている。

戦前の暮らし

戦前は、母、祖父母、叔母、叔父の5人で生活しており、実家は農家だったのでイグサを育て、ゴザを売って生計を立てていて、私は兼城国民学校に通っていました。

1944年頃

近づく戦争の足音

10・10空襲以前に、潮平には日本軍が駐留していました。兵隊たちが、時々家を訪ねてきて、一緒に食事をとることもありました。集落のシラカー（潮平白川）で一緒に泳いだりもしていて、日本軍と親しくしていました。自分も兵隊になるのが夢というか、将来国のために働くことがいいことだと教育されていました。

現在の潮平中学校あたりに大きな山（通称ミーガジモー）があり、日本軍が陣地壕を造っていました。壕内の土が崩落しないよう松の木で柵を作っていて、これに使う松の皮はぎに半強制的に駆り出されていました。

学校の校舎は日本軍の兵舎として使われていたので、隣の阿波根の村屋（当時の公民館）で勉強していましたが、当時何を勉強したのかは覚えていません。

そのころから日本軍による軍事演習が夜間に繰り返し行われていました。私たちは空襲警報が出たら、避難壕に逃げるということを繰り返していました。

1945年3月下旬から6月頃

潮平壕での避難生活

空襲が次第に激しくなり、海からも艦砲射撃が撃ち込まれるようになってから本格的に潮平壕に避難しました。壕内は長さ約150m、広いところで幅4～5mありました。真ん中は通路として空け、両側に戸板を敷いて生活しました。そこで老人、女性、子どもの約500人余りが避難していました。中は暗く、照明に豚の油を燃やして小さな火を灯す道具（トゥンドートゥブサー）を使っていました。小さな灯りでも目はだんだん慣れてくるので不便さはないものの、壕内に煙が充満するので息苦しく、鼻の中や痰が真っ黒になりました。

壕生活の中で一番大変だったのが、水や食糧の調達でした。水を汲むのは子どもの仕事だったので、私も夜間、攻撃が止んだ時に水を汲みに行きました。畑のくぼみに溜まった濁った水の上澄みを汲んで利用しました。もちろん米のとぎ汁も捨てずに使いました。

夜に何百人もの人たちが一斉に食事を炊き始めるので、狭い壕の中はあっという間に煙が充満します。そんな時には、煙が外に出るまで腹這いになり、我慢するしかありません。とても苦しい時間でした。

戦闘がひどくなってからは、簡単に外に出ることもできず、皆が壕のくぼみで用を足していたので、それはひどい匂いでした。シラミもいっぱい湧いて岩の裂け目、着物の縫い目、髪の根元などいたるところにいました。そのような環境の中で寝たり、食べたり、トイレをしたりしていました。

そのうち日本兵の将校が、日本軍が壕を使用するから出て行けと追い出しに来ました。区長が「待ってくれ」と交渉しましたが、命令には逆らえず、全員が壕を出されることになりました。私は母親と一緒に武富まで歩いて移動し、民家に1～2日程隠れて過ごしましたが、他に行くところもなかったので、結局壕に戻りました。すると日本軍はいなくなっていて、ほとんどの人が戻ってきました。

1945年6月頃から1946年頃

捕虜となり戦争が終わる

入口から黄燐弾（爆弾の一種）が数回投げ込まれました。全員壕の奥にいたので奇跡的に怪我人は出ませんでした。6月14日に壕の外から「デテコイ、デテコイ」と聞こえてきました。最初の人が恐る恐る外に出て、そのあとはぞろぞろと壕の東口と西口から出ていきました。その後、今の兼城十字路あたり（通称アマダンメー）に集められ、そこから上陸用舟艇に乗せられ、そのまま沖合の軍艦に移されました。「海中に沈められるのではないか」と恐れましたが、北谷あたりの浜に着き、中城村の安谷屋の収容所まで連れて行かれました。無事生き延びることができたのです。

そこから金武の中川にある収容所に連れて行かれ、兼城に戻るまで1年近くかかりました。兼城は瓦葺きの家などが比較的残っており、1軒の家に2～3家族が共同で住みました。そして1946年になってから、やっと潮平に戻ってくることができましたが、自宅は敵の戦車の侵入を防ぐ目的で、日本軍が屋敷を囲っていた石垣を崩しており、敷地内は瓦礫の山になっていました。集落内の田んぼにはえぐられたような艦砲射撃の跡があり、戦争の傷跡があちらこちらに見受けられました。青い木もほとんどなく、荒れ果てた廃墟で徐々に暮らしを立て直していきました。

戦争を知らない人たちに伝えたいこと

戦火を生き延びたことが奇跡だと思っています。命拾いをした壕とはいえ、戦後かなり長い間、入る気はしませんでした。苦しさを思い出したくなかったのかもしれません。戦争は人間の命を奪い、自然を破壊し、文化財を消失させます。ただ、戦争は人間がやることだから人間が止められることだと思います。

今は物も豊かだし、お金があればなんでも買えます。けれど、物を大事にすることは人を大事にするということに繋がると思います。色々な人が戦争体験を語っていますが、子どもたちはどう受け止めていますかね。戦争体験は伝わらないと意味がないと思います。

今は戦争体験者が少なくなってきており、戦争体験の記憶が社会全体で次第に薄れていっているように感じます。

戦跡と当時の照明具

潮平壕

字潮平の北東部から字阿波根にかけて延びる壕。戦時中、潮平の住民560人以上が避難し、死傷者が1人もなく全員が助かったといわれている。
戦後、多くの命が救われたことに感謝し、潮平権現壕と呼んで、入口付近に鳥居と碑を建立し、毎年旧暦5月5日は壕に感謝と平和を祈願する潮平権現祭を行っている。現在壕内への立ち入りは禁止されている。

トゥンドートゥブサー

戦時中、壕の中で使用した灯明。
※写真はレプリカです。

現在、戦争体験の継承が課題となっています。可能な方は、祖父母に戦争体験の話を聞いてみてはいかがでしょうか。また沖縄戦については沖縄県平和祈念資料館などの施設で学ぶことができます。戦争体験の記憶が薄れないように積極的に知ろうとする姿勢が、今の私たちに求められています。

沖縄戦における糸満市域の情報は、「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で詳しく紹介しています。

問い合わせ
生涯学習課 ☎840・8163